

これまでとこれからの三十年

野々宮 徹

過酷といわれていたマラソンに女性が挑戦するようになるのは今から約三十年前。さて、これからの三十年、いったいどんなことが起こるのでしょうか。

日進月歩という表現が程よい響きを得ていた時代は遠くなり、「十年一昔」という表現も二昔、三昔としなければならぬような時代である。東京オリンピック三十年、明年の戦後五十年という節目の時期を迎え、女性スポーツのこれまでの三十年とこれからの三十年を考えてみるのはいかがであろうか。

東京オリンピックのころ

三十年前の東京オリンピックをかなりよく記憶している人は、すでに四十四歳を過ぎた人たちである。さらに「虹と雪のパレード」の大合唱で幕を閉じた一九七二年の札幌オリンピックを知っている人もまた三十歳代に入っている。今日、世界に冠たる長寿国のわが国も、東京オリンピックの年の平均寿命は、男性六七・六七歳、女性七二・八七歳。欧米なみになったと言われたものの、ともに現在より十歳ほど短かった。

女性のスポーツ参加についてもその道のりは険しく、わが国では一九七三年の第一次オイルショックのころに転機を認めることができよう。それは、七二年をピークとするボウリング・ブームや翌年に高まりを見せるジョギング・

ブームなど、女性ばかりでなく幅広い人々のスポーツ参加を保証するような活動がもたらしたものであった。

一九六七年の一枚の写真

アメリカにおいては一九六〇年代に始まるフェミニズム運動が、広く一般の女性にもスポーツの機会を拡大してきた。この背景には、ベトナム戦争（一九六一―七三）の矛盾点を目の当たりにし、それまでの伝統的な見解や考え方、文化に対する反省、問い直しが加速されたことがあげられる。

女性には過酷であると考えられていたマラソンに対する考え方もその典型であろう。このマラソンに女性が挑戦するようになるのは、今から約三十年前の一九六六年である。世界で最も古い大衆マラソンといふべきボストン・マラソンにヒンゲイ嬢が飛び入り参加したがそれがそれである。女性の参加規定もなかったため、男装して直接行動に出たということである。これを契機に議論が高まり、七二年から正式に女性の参加が認められるようになったのである。写真は「The Great American Sports Book」'78に掲載されている



組写真である。これは六七年に「K・スウィツァー」という男女不詳の名でエントリーを許された二六一番のキャサリン・スウィツァー嬢が、フードのついたウエアを脱いだため女性ということがわかり、これを知ったトレーナーのJ・センブルがコース外へ押し出そうとするのを、彼女の友人が阻止しているところである。当時の女性のスポーツ参加に対する考え方、またこれを乗り越えていこうとする姿を物語るもの

として誠に貴重な写真といえよう。この後、通称「タイトル・ナイン」といわれる教育現場における男女の性的差別を禁止した法案（教育法第九章の修正条項）が七二年に議会を通過した。米国WSF（女性スポーツ財団）の設立はこの二年後、七四年である。

どう生かすか女性の視点

これからの三十年もまた、今の延長とはいえない見通しを立てることは難しい。実は、老年人口が四人に一人となる超高齢化社会の試練を迎える二〇二五年は、今から三十年後。つまり現時点は、東京オリンピックと福祉国家の存続を真に問われているであろう二〇二五年の中間年に位置しているのである。答を用意しているわけではないが、女性スポーツという視点で獲得してきた諸成果は、今後、高齢者も含めた広義のハンディキャップトに対して、また、社会のフレームをどのように考えるかといった基本的な点でも、その役割を担い得るものであるし、そうあらねばならないことは言うまでもない。

△のみやおる/VWSFジャパン会員、愛知教育大学教授、スポーツ史専攻